

その他の科目，地域連携実習

担当教員：山崎哲司他

## 平成 21 年度の地域連携実習

国語教育講座・東 賢司

### はじめに

地域連携実習が「その他の科目」に分類されること自体が異常な気もするが、単位認定上の理由であろうと理解し、この講義の報告を行わせていただくことにした。

愛媛大学が教員養成を行う上での教育実践活動の基盤となっているのが「地域連携実習」である。しかし、これらを支えているのは、山崎哲司先生、白松賢先生ら数名の教員と本年度新設された教職支援ルームの支援員らごく少数の先生方であり、一步間違えば崩壊する危険性も含んでいるといつも感じている。それでも、実践活動は絶対に必要という信念を持ち、本年度の実習を粛々と進めてきた。

ヤフー・ジャパンにアクセスして、「地域連携実習」という用語で検索をかけると、10位までの6つが愛媛大学関係で占められる。

本年度は、教職支援ルームが本格的に稼働したことにより、学生の動きが大きく変わった。まず、教育学部生以外の学生が地域連携実習に参加するようになったこと、また、教職支援ルームに教職に関する種々の情報が集中することにより、学生がその情報を求めて訪問するようになったことである。

教職支援ルームの1年間の様子を見ると、支援員の先生が着任し活動を始めた4月には、「何ができたのだろう」と遠巻きで眺めていた学生達が、教員採用試験の対策講座などを契機に、支援ルームに一気に流れ混むことになり、また、地域連携実習の目玉の活動であるワクワクチャレンジサタデーなどで、学生が頻繁に使用するようになり、3つある支援ルームはいつも人が溢れている。椅子が足りない、場所がないという状態が日常茶飯事になるほどの盛況ぶりである。また、文部科学省GPの予算で購入した印刷機兼コピー機のインク台も1年間で数十万円かかっており、支援員の先生がいつも目を光らせている状態である。大変コストのかかる活動ではあるが、山崎先生を始め種々の外部資金、内部資金の獲得により、運営を

行っている。

### 活動報告

地域連携実習の登録数は、528名。連携校の学校からは19の事業分類、89の活動が提供された（教職支援ルームまとめ）。その中の一つを報告したい。文書は教職支援ルームのホームページに掲載したものを、誌面の都合で一部編集した。

平成22年（2009年）1月23日（土）に八坂小学校・東雲小学校の5、6年生を対象に開催している「ワクワクチャレンジサタデー」を訪問しました。その活動を紹介したいと思います。

本年最初の活動です。この日の参加した大学生は1年生7名、2年生7名、3年生4名、4年生4名の22名、小学生は5年生が9名、6年生が5名の14名。その他、保護者・指導者等もあわせて40名ほどの集団が活動に参加しました。愛媛大学の地域連携実習としては大きい規模の活動です。

#### 14:13 授業

本日のテーマは「みんなで考えようーなぜ学校にゆくの一」です。この授業のために、指導案の検討、模擬授業等の試行錯誤を繰り返し、この日に備えてきました。

まず、先生から本時のテーマを説明したあと、「学校で大切だと思ふことをランキングにしてみよう」という提案がありました。事前に分かれた班で話を進めてゆきます。話あいのルールとしては、①最後まで聞く、話す、②人を傷つける言葉を使わない、③理由をつけて話すの三つが示されました。子どもたちは、それぞれ自分が考えた順位を班の中で共有してゆきます。

みんなの意見が出そろった後、先生からは「班で話あいをして、ランキングを作ろう」という指示がありました。事前に示された5つのキーワード（勉強・遊び・給食・学校行事・先生）を用意された台紙に貼り付けていきます。

作業が終了したあとに各班の発表がありました。4つの班の班員が順番に前に出て、発表を行います。4つの班ともに第一位が勉強、3つの班の第二位は遊びという結果になりました。質問の時間を取り種々のやりとりがありました。

た。また、全部の班の意見を聞いた後、自分の考えをワークシートに書き、この活動を終了しました。

最後に担当の先生が外国の子どもの話をしました。「世界には、学びたくても学べない子どもがたくさんいる…」、この言葉を子どもたちはどのように受け取ったでしょうか。

#### 16:22 反省会・協議会

三名の先生と大学生が、授業についての研究協議を行いました。最初に授業者とティーチングアシスタントからの自評、次に大学生からの質問や感想が述べられ、最後に、先生方からご指導を頂きました。

授業に対する質問としては「班でランキングを作る意味は何か」「話あい活動について、自分の意見がでない子どもにどのように対応すればいいか」「どのようにしたら自分が伝えたいことを伝えられるのか」等、次々と感想・意見・質問が飛びだしました。

司会がその意見を集約し、①単元と内容のずれについてどのような手法を採ればよかったのか、②(活発な意見を引き出すために)テーマに沿った発問をどのようなものにすればよかったのか、③意見交換ができる班とできない班について、話あいを継続させるための手段としてよい方法はないかという三点となり、指導助言が求められました。

助言としては、①ランキングを付けるのがいいかどうか、②「学校で学ぶ意義」について、授業者(大学生)はどのように考えているのか、③学習指導要領に記載される学級活動について、1と2のどちらをやっているか分からない、④キーワードに「仲間」を入れないのはなぜか、⑤ワークシートの作り方がおかしい等の授業に対する指摘の他、大学生へのアドバイスとして、①思ったことをしっかり発言すること、②社会性をしっかりとほぐむこと、③読んでほしい本の紹介などがありました。

最後に授業者からの感想として「題材と内容の違いについて、自分が何をさせたいのか明らかにしなければならなかった」「自分たちが何をしたいのか薄かった」等の発言がありました。

#### 訪問を終えての感想

研究協議の時に出席した大学生からの3つの疑問についてですが、①については、あらかじめ大学生が答えを用意したからではないか(授業展開方法の誤り)、②と③については、子どもからはこのような発言が出るだろうという想定不足、どんな発言がでも対応できるという準備不足、何をさせたいのかという追求不足などが思い当たります。あわせて、これらのことは、3年次での附属実習でもよく指摘されている事を思い出しました。

協議中に出された「発言が出ない班にどのような対応を

すればよいか」という疑問に象徴されるように、大学生の興味は、「how to(こんな時、どうする?)」に重点が置かれすぎてるように感じています。このことは、この訪問の場合ではなく、他の実習においてもよく見かける光景です。このような追求姿勢の先には、「教員採用試験に合格するにはどうすればいいの?」ということにつながりかねません。

このような様子を見かける度に、以前のシンポジウムである年配の評価委員が「愛大生は近回りしすぎてるのではないか?」と疑問を呈されたことを思い出します。大学生が教師になると、いやでも経験が増えてきて「こんな場合はこうしよう」という対応は自然と身についてくるでしょう。その場でどのように対応するのかというマニュアル的追求ではなく、「自分はどのような教育をしたいのか」「自分はどんな子どもを育てたいのか」「自分の教育とは何か」という教師になる目的や自分の使命感を考える活動にしてほしいと思いました。

我々、実習実務を担当する者も、教育学部の使命として、教員採用試験に合格する者を増やすという目的のために、最短距離で教師となることができる道筋を用意することも大切である、しかし、より高い志を持ち、自らの理想を模索・追求ができる学生を創出すること、また、成長を続ける教師であるにはどのような力が必要なのかを考えさせるプログラムや環境を準備することも大切なのであらうと強く感じました。

この東雲・八坂の活動は、既にご退職された先生、冒頭にあげた数名の先生が自分の時間を削って作りあげて下さった。現在は、公立学校の先生方のご指導くださっている。

学生の感想は、FICの中に書かれている。このシステムは数学の平田先生が管理して下さっているが、このことを知る人も少ない。FICのおかげで毎年のゴールデンウィークは返上されている。システムが突然止まってしまう、出張先まで追いかけたこともある。

参加してよかったとかよくなかったという単純な感想はほとんど書かれることはなく、「今回の自分の活動はどうだったか」「次にどのように繋げるか」というまさに実践の省察が行われている。この記述に関しては、担当者から少しの注意を与えることもあるが、基本的には自己研鑽型であり、文書力を高めるといふ国語の学習にも繋がっている。

このような活動を積み重ねている学生は、教員採用試験に合格して当然というように映る。現在採択の文科省GPが求めている課題も「質の高い教員養成」である。彼らには、「先生になってから何をするかを考えてほしい」と呼びかけている。